

質的授業分析の今後の課題

広島大学 小 篠 敏 明

1. はじめに

文学研究の方法には統計手法を用いた自然科学的方法から直観を重視する内省的方法に至るまで数多くの方法が存在するであろう。が、作品の鑑賞を離れては文学の研究は存在し得ないであろう。授業が英語科教育の最も中心的な営みである以上、授業を離れた、あるいは授業に帰らない研究は英語科教育の中心的活動ということではできないであろう。授業こそは研究の出発点であり、最終到達点である。

このような共通認識の下にわれわれは共同研究「質的授業分析」に着手したのであった。このささやかな共同研究を通じて、われわれは授業の改善に少しでも実質的に貢献できればと念じている。

2. 本研究の基本的性格

われわれの共同研究の基本的性格は、まず第一に実際授業能力の向上を目指す実際研究であるということである。およそ、教育研究というものは本来的に実際的なものではあるが、初任者講習が社会的問題となっている現在、特に実践的研究が求められているといえるであろう。われわれはこの研究において直接的に授業能力改善に寄与することを狙っている。

第二に、この共同研究は教員養成という視点から、その枠組みの中で研究するものである。授業能力の改善・向上といっても、英語教師としてすでに自立している教師の求めるものと、教員養成大学在学中の学生あるいは教師になりたての経験に乏しい初任教師に要求されるものは、本質的に全く異なるといえるであろう。われわれの研究プロジェクトにおいては、後者、即ち、教育実習生あるいは初任者の授業能力をどう改善し、自立させるかという点に主たる関心があるのである。

第三に、われわれの研究は授業記録を具体的に比較するという比較研究の方法を採用している。授業のどの側面を改善すべきかについて文献研究により理論的にアプローチする方法を採らずに、本プロジェクトにおいてはビデオ録画した熟練教師と非熟練教師の授業を比較することからより直接的に、また、より具体的な形で授業において改善すべき点を特定しようと試みたのである。

第四に、われわれの研究は通教科もしくは超教科的な研究ではなく、教科中心の研究である。従来、授業研究、授業分析の理論は教科を超えたところで構築され、各教科で実践されるという傾向が強かった。たとえば、英語科の授業分析法として知られている Moskowitz の分析システムは Flanders の教科の枠を超えたところで構想されたシステムを英語科（言語教育）向けに改造したものであった。このため、一般的には、授業理論の枠組みが英語科の特殊性に合わず、英語科では授業研究、授業分析が成熟しなかったように思われる。このような反省に立って、本プロジェクトにおいては、まず、英語科における授業事実からすべての研究活動を始める。それはまさに「英語科の、英語による、英語科のための授業分析研究」である。

このことは、しかしながら、他教科の授業分析研究や一般授業学の授業理論を全く無視しようとするものでは決してない。出発点は英語科であるが、長期的展望においては他教科の授業理論

と、また一般教授学の授業理論との関連性を追及することになるであろう。

第五に、本共同研究は、事の性質上、当然のことながら、組織的研究ということである。われわれの研究は、方法論上、いわゆる客観的方法より、主観的方法を採用している性格上、主観に流れるとの批判を受けるかもしれない。このような欠点を少しでも補うべく、チームによる組織研究とし、個人的バイアスを修正しようと試みた。「ひとりの知恵より多数の知恵を」である。

第六に、本研究は閉鎖的なものではなく、開放的なものである。われわれはこの共同研究チームを決して閉鎖的グループと考えてはいない。基本的プリンシプルに関して同意を得られるかぎり、われわれは研究グループを拡大したいと考えている。また、われわれはこの研究の成果を全体に還元し、同時に全体からのフィードバックを得たいと考えている。研究及び研究グループの開放性は研究を実践的且つ建設的にする上での不可欠の要諦である。

3. 本研究の方法に関する基本的立場：授業に教えを乞う

本紀要において、われわれの共同研究の成果を中間報告という形で発表したのが、これに対していくつかの問題点が指摘されるかもしれない。第一に指摘されるべき点は研究の「否定性」もしくは「破壊性」に関してであろう。実際、2編の論文はFIACシステム及びFLintシステムを批判もしくは否定することに全力をあげていると感ずる向きもあるであろう。われわれの本意はFlanders及びMoskowitzを批判することにあるのでは決してないのである。もちろん、われわれの研究目的のためにはこれらの方法が十分でない点においては両者を批判しているといえるかもしれない。が、そのことは他の分野におけるそれらの有用性を否定するものでは決してない。われわれの中間報告に否定的トーンがあるとすれば、それは、自己の方法論を確立するための過程に不可避免的に生じるひとつのステップと解釈していただきたいのである。

第二に指摘されるであろう点は全体構想の欠如であろう。本中間報告においては、「教授目標の指導」及び「指示の仕方」に関して分析しているだけで全体の構造もしくは枠組みが見えないという批判が提出されるであろう。現時点におけるわれわれの研究はいわばパイロット・スタディ的なものであり、まだ全体構想を提示する段階にないことを率直に認めなければならないであろう。われわれは授業事実の分析と同時平行的にこれらの作業も行っていきたいと考えている。

第三の問題点としては先行研究に関する文献研究の欠如が挙げられるかもしれない。この点に関して、われわれは、文献研究の一般的重要性は認めつつも、現時点においては絶対的に必要なものであるという立場はとっていない。先人の研究は大切である。しかし、われわれの研究目的に即していえば、授業研究に関する過去の研究は経験（の記憶）に基づいた研究であり、ビデオ記録を基にした精確な分析ではなかったし、また、ビデオ記録をベースにしたものでも方法論上量的分析であった。この点でわれわれの研究には直接的に参考にならなかったのである。

本共同研究におけるわれわれの方法論上の基本的立場は「授業からすべての出発をし」「授業に教えを乞う」というものである。英語科の授業事実の中から、英語科の授業事実の光に導かれて、英語科の授業の姿を明らかにしようとするものである。それはself-generatingな概念であり、self-generatingなカテゴリーの創造に他ならない。思うに英語科における授業研究は、前述のごとく、あまりにも他教科、一般教授学の影響が強すぎた。その結果、独自の研究へのよい刺激となるよりはむしろ悪い影響を受け、研究にある種の混迷を引き起したように思える。われわれの研究は、このような反省の下に、もう一度授業研究の原点に立ち帰り、授業事実から再出発してみようとするものである。

4. 今後の課題と展望

われわれの共同研究はまだその緒についたばかりであり、到達点は遠い。今回の中間報告もパイロット・スタディ的な性格が強いということが出来るかもしれない。今後、多くの研究者の方々の助言を得て、研究の質的向上を目指し、少しでも初期の研究目的を達成できるよう努力を積み重ねていきたいと考えている。今後のわれわれの課題としては、現在、次のような点を考えている。

- (1) 今回の研究と同一の枠組みの中で未検討の分野の分析まで研究を拡大する。

今回の報告で実際に分析を行なったのは、教授目標の指導と指示の仕方の2分野にすぎなかった。(これとて包括的な分析とはいい難いであろう。)更に分析、検討すべき分野や問題は多い。これらの残された分野を今回と同じ資料(ビデオ化された授業)、同じ分析方法を用いて、即ち、同一の枠組みの中で検討していかなければならない。このことを通じて、教授の授業の改善すべき点に関する新しい発見がなされるであろうし、同時に分析方法の改善もなされるであろう。

- (2) 同一の研究枠組みの中で別の授業資料を用いて検討を広げ、深める。

今回の分析で用いた授業資料を用いた分析、比較が一応終了した段階で、同じ種類ではあるが、しかし別の資料を用いて同様の分析研究を行うことが次の段階の課題である。即ち、今回のわれわれの分析結果がどの程度普遍性、一般性を持っているかを別の熟練教師、非熟練教師(別の教材、別の生徒)の授業の分析結果に照らして検討しようというものである。別個の、異なった授業資料の分析を比べて、全く異質の相違点が出てくれば、両方の結果を総合的にとらえる新しい理論枠を追求しなければならないかもしれないであろう。両者が本質的に同質のものということになれば今回のわれわれの分析結果の普遍的妥当性が確認されたことになるであろう。いずれにしろ、この段階の作業を行うことによって、研究成果の普遍的妥当性を高め、ひいては授業能力改善への貢献度を高めることになるであろう。

- (3) 別グループの追試による検討を行う。

(2)における、別の資料を用いての検討は(1)における分析結果のチェックという側面も持っているが、このステップはそのチェックを別の研究チームによって更に強化、深化しようというものである。このチェック作業が行なわれるためにはもうひとつの研究グループ(あるいは個人の研究者)の存在が不可欠であるが、それが存在していない現在においては単なる希望にすぎないとしかいえないかもしれない。

- (4) 研究結果を過去の研究成果と比較、検討する。

最後に残された段階は文献研究である。われわれの研究の成果を過去の類似した先行研究の結果と照合し、授業研究全体の中に正しく位置づけることがこの段階の作業の主目的である。検討すべき分野としては、(1)英語科における過去の質的研究、(2)他教科における過去の授業分析の研究成果、及び、(3)一般教授学における過去の研究成果などが挙げられるであろう。

5. おわりに

われわれの共同研究はまだその緒についたばかりであり、その成果というべきものはまだ何もない状態である。が、「授業こそが英語科教育活動の中心」という信念のもとに更に継続研究を進め、また、多くの研究者の助言、応援を得て、この研究をfruitfulなものにしたと念じている。